

夕立 (貸浴衣汗雷)

へ夕立の 雨も一と降り馬の背を 分けて涼しき川岸に 柳の枝の  
寄添ひて いつしか色に鳴神の 音さへ遠き筑波東風 へ残る暑さを  
川水へ 流す上手の帰り船 へ草の葉に 宿りし月も小夜風に  
憎やこぼれてばら／＼と 露か雫か 雫か露か 濡れて色増す野  
辺のいろ へ粹なお方に釣合はぬ 野暮なやの字の屋敷者 十の年か  
らお小姓を 勤め通して御側役 へはたちは越せど色恋は 掬きび  
しく白玉の 露にも濡れし事はなく へあとはいらへも長づとの 油香  
りて媚めかし 初の御見に手を取られ 飛立つ程の嬉しさは へ蚊  
帳より胸に波うちて 紅麻うつる顔の色 またひとしきり降る雨に  
仲を結ぶの雷や こわさに抱き大川の 深き契りぞ交しける。